慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代日本における社会学の草創と福沢諭吉の社会学思想の再考察
Sub Title	The origins of sociology in modern Japan and the sociological thought of Fukuzawa Yukichi
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.6 (2011. 6) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	十時嚴周先生追悼論文集 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110628-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本における社会学の草創と福沢諭吉の社会学思想の再考察

川合隆男

一　近代日本における社会学の草創
二　福沢諭吉の社会思想形成の特徴
三　福沢諭吉の社会学思想についての再考察
四　むすびに

一　近代日本における社会学の草創

わたしたちの身の廻りをみても衣食住や情報通信、交通、医療等の動きや変化は止まることなく日進月歩の世界である。同様に学問の世界も、社会学の領域といえども日進月歩である。諸学問や社会学の最前線の動向にしっかり眼をすえて研究を進めていくことは重要である。

同時に、学問の歴史を振り返りその土壌を掘り起こし豊かにしていくことも大切である。そうした試みが衰えると、いくら新しい種子を次ぎ次ぎと蒔いても育たないからである。本稿は福沢諭吉の社会学思想を中心にとり

あげて日本社会学史研究のひとつの可能性を模索する小論である。

日本社会学史研究の可能性については、（a）社会思想ないし社会学思想、社会学説、社会学上の理論的パースペクティブ、イデオロギーをめぐる学史研究、（b）人々の生活、社会問題、社会観察・社会調査などに焦点を据える学史研究、（c）社会学の個別領域を対象とする学史研究、（d）学問運動・活動の組織化および制度化の動きに焦点をあてる学史研究、（e）社会学の学問運動・活動を担った個々人の足跡に焦点をあてる学史研究などに一応分けることができる。[1] 本稿は、主に（a）の領域に関するものである。

福沢諭吉に関しては広くよく知られて彼の著作も多く、これまでに福沢諭吉についての研究も厖大なものになってきている。しかし、近代日本社会学史研究のなかで彼の社会学思想に関する研究はいまだに極めて少ない。

武田良三は「わが国における市民社会の形成と社会学」という論文のなかで「福沢が日本の市民社会形成の旗手であり」、「一個の独自の社会学者であったこと」、「福沢の「人間交際の論」とはまごう方なく一個の社会学を意味していたのである」[2] として、中等社会論、市民社会論の視点から福沢の社会学を位置づけていた。蔵内数太は日本における社会学の成立過程において福沢諭吉が特に近代科学の因果的考察法や社会観察を身につけてそれを社会に適用していた点に注目して、「わが社会学の歴史において占むべき彼の地位の重要なることを考えさせられるのである。彼は社会学の学論はしなかったが、社会学を実践したというべきである」[3] と指摘していた。ともに近代日本の社会学史研究の上で先駆的な問題提起をしていたと考える。

他方、『日本社会学の形成―九人の開拓者たち―』を人物史的に書いた大道安次郎は、その中で帆足万里、西周、加藤弘之、外山正一、建部遯吾、遠藤隆吉、米田庄太郎、高田保馬をとりあげていたが、福沢諭吉をとりあげることはなかった。[4] 最近になって接した富永健一『思想としての社会学―産業主義から社会システム理論まで―』（新曜社、二〇〇八年）では、その序章で「日本の近代化と西洋思想――福沢諭吉」が取り上げられていたが、

日本における社会学思想の生成という観点からそれまでの歴史的文化的な文脈や福沢の社会学思想そのものの検討が充分に深められないままに、近代化、産業化の視点からのみ福沢の思想をとりあげていきなり「第一部、サン・シモン、コント、スペンサー」の思想につないでいく構想や論理は、性急の感が否めなかった。

第二次大戦の終戦後にも特に社会学界は活況を呈するようになるが、一九六一年に「日本社会学史学会」が設立されて、漸く河村望『日本社会学史研究（上・下）』（人間の科学社、一九七三、一九七五年）、秋元律郎『日本社会学史―形成過程と思想構造―』（早稲田大学出版部、一九七九年）、秋元『近代日本と社会学』（学文社、二〇〇四年）など戦後日本の代表的な社会学史研究が出現してきた。先に述べた社会学史研究のうちそれらは、（a）社会思想ないし社会学思想、社会学上の理論的パースペクティブの領域での研究であり、河村の研究はマルクス主義の立場からのもの、前述の富永健一の『思想としての社会学』は近代主義、産業主義の理論的パースペクティブに基づく研究、武田良三や秋元の研究は市民社会論を軸とする知識社会学的な研究であったといえる。

本稿で福沢諭吉の社会学思想の再考察を試みようとするのは、先にあげた武田良三や蔵内数太が適切に指摘していた福沢の社会学思想をめぐる問題提起を継承して、もう少し深めて考察してみたいという意図である。

二　福沢諭吉の社会思想形成の特徴

わたしの手元にある『図説　明治人物事典――文化人・学者・実業家――』[5]をみると、当時の新聞雑誌にのった人物挿絵、風刺画によれば福沢諭吉は何にでも口を出す「躍ッ蛙（はねかえる）」（『団団珍聞』明治一〇年五月二六日号）、自由民権運動の高揚に慎重な姿勢をとる福沢を風刺して「余り深みに踏み込むまいぞ」鷺（さぎ）の「二の葦（あし）」（『団団珍聞』明治一四年一一月一二日号）、言論人として影響力をもつようになり「手前味噌」の「お福の手料理」（『団団

珍聞』明治一五年一月二一日号）、福沢を囲んで慶應義塾同窓会での質素と清潔を旨する会合について「宴会の模範」（『二六新聞』明治三三年四月一八日号）、明治三四年二月の福沢の死去に際しては「節分の夜に福が外」として鬼も驚いている様子の挿絵（『団団珍聞』明治三四年二月九日号）に描かれていた。

「独立自尊」「一身独立して一国独立する事」を説いて一身にして二生を生き「掃除破壊」と「建置経営」を図ろうとした福沢の生涯を少し斜めに構えて人物挿絵や風刺画として描くと、「躍ッ蛙」や「二の葦」、「お福の手料理」、「宴会の模範」、「節分の夜に福が外」などと描かれていたところを考えると、ある特定の人物像ではなかなか描き切れない特徴を持っていたのかもしれない。

神山四郎は「福沢は固い一つの理論を言い張るのではなく、時に応じて「処方箋」を書くのだと言っている」、「プラグマティクな思想家」「ナショナル・リベラルな思想家」であり、「……初めは自由主義者、民権論者、あとではナショナリスト、国権論者と、時代とともに変わったのだ、挫折したのだというふうにはどうもとれない」と述べている。(6) そして思想家のタイプをイギリス哲学者のI・バーリンの名称を借りて「ハリネズミ型」と「キツネ型」の二つに分け、福沢は「たった一つの大きいことだけを狙ってしゃにむ進むハリネズミ型」ではなく、「いろいろな知識を持っている人が状況に応じて一番妥当な有効な実現性のある知識を使う賢い生き方、相対主義の行き方」の「キツネ型」であるとしている。(7)『福沢全集』、その「緒言」、『福翁自伝』などにもよく表れているところであり、人生を振り返って節節に臨機応変に対処していく姿であり、興味深い指摘ではないだろうか。

視点を変えて、福沢の行動傾向の特徴として特に（i）旺盛な好奇心、（ii）起業心、（iii）批判精神、（iv）「惑溺」の戒め、ということに注目したい。

（i）　旺盛な好奇心

鎖国から文明化へ向かう歴史的な激動のもとで福沢諭吉も強い好奇心をもち続けた情動の人であった。強く知情意を持つ人であった。

（ii） 起業心

福沢は新たにいくつもの事業を起こしたり創業を試みる人でもあった。慶應義塾の創設、明治二年「福沢屋諭吉」の名で書物問屋組合に加入して出版業の自営に着手して、後の「慶應義塾出版社」へと続く福沢の出版業（明治三～一五年）の起業[8]、明治一四年の政変後の明治一五年の新聞社『時事新報』社の創業、明治六年頃から自宅で集会を催して演説討論の練習を始めて明治八年五月に三田演説館の開設[9]、大学部の創設（明治二三年）なども特筆される。また、自らの起業にとどまらず広くわが国の経済・実業活動を一層推進していく必要を説き、銀行・保険・貿易・鉄道・紡績・海運業など幅広く支援し人材をも輩出していった[10]。

（iii） 批判精神、抵抗精神

「私のために門閥制度は親の敵で御座る」という『福翁自伝』の一文のように、自ら身にしみて前半生を「掃除破壊」に志す姿勢が示されていた。そして「門閥の人を悪（にく）まずしてその風習をにくむ」として自らも新しい風習、「独立自尊」、新しい人間交際のありようを生涯にわたって「我以做古」を実践しようとした。後半生の新しい国家と社会の「建置経営」の試みも、時と場所を見据える批判精神、懐疑の精神、抵抗精神を失うことはなかったと考える。

（iv） 「惑溺」への戒め

今日では「惑溺（わくでき）」という言葉も、福沢諭吉の思想を理解しようとするうえでは重要な側面である。この「惑溺」という言葉がもっとも明確に出ているのは福沢『文明論之概略』であり[11]、「古習」、「権力偏重」、虚飾、迷信・妄信・尚古、頑固な文明主義一辺倒・欧化主義、また極端なイデオロギー主義・宗教主義などで「習用の久

しき、あるいはその事物に就き、実の効用をば忘れて、ただその物のみを重んじ、これを装いこれを飾り、これを愛しこれを眷顧（けんこ）し、甚だしきは他の不便利を問わずしてひたすらこれを保護せんとするに至ることあり」[12]とする「惑溺」への戒めである。

更に、福沢の思想形成の特徴は、基本的には福沢自らの幼少期からの生活体験や歴史経験に支えられて、欧米の啓蒙思想との出会いに刺激されつつ、どのようにして文明化にみる民心の発達と国家の独立を図るかを生涯にわたって模索し続けた重層的な思想形成にあるといえる。ここでは、（a）経験の思想化、（b）学問による思想化、（c）歴史状況における再解釈による思想化という三つの働きである。

（a）経験の思想化

『学問のすすめ』の初編の冒頭にある「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云えり」という一文はあまりにも有名な天賦人権論のことばである。これはアメリカ合衆国の独立宣言（一七七六年）の冒頭や福沢『西洋事情外編』での「チャンブル氏の経済書」翻訳などが確実に強く影響してこのような一文を書かせ「云え、り」と記したことは疑いないが、より根底的には自らの生い立ちや体験、当時の歴史状況での西洋経験に裏打ちされたところが大きいのではないかと考える。先にも引用したが『福翁自伝』に「私は毎度このことを思い出し、封建の門閥制度に憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私のために門閥制度は親の敵（かたき）で御座る」とあり、「交際（つきあい）、朋友互いに交わって遊ぶ子供遊の間にも、ちゃんと門閥というものを持っていて横風至極だから、子供心に腹が立ってたまらぬ」、また、「父母の遺伝」として「私は中津にいて上流士族から蔑視されていながら、私の身分以下の藩士は勿論、町人百姓に向かっても、仮初めにも横風に構えてその人目下に見下（みくだ）して威張るなどということは一寸（ちょい）ともしたことがない」と書いており、こうした経験に支えられて『学問のすすめ』で「人は同等なる事」の天賦人権の権利通義の同等を宣言する一方で、権利通義と人の働きとしての有様と

の異なる趣旨を説いていった。

長崎そして、大阪、緒方塾での蘭学修行、自ら進んで咸臨丸に乗っての万延元（一八六〇）年初めてのアメリカへの渡航、「社会上の習慣風俗は少しも分からない」ままにさまざまな見聞を重ねて帰国している。福沢は更に文久二（一八六二）年の使節団に「反訳方」として加わり、約一カ年の旅を重ねている。「事情探索の胸算」として、特に「原書を調べてソレでわからないことだけをこの逗留中に調べておきたいものだと思って、その方向でもって、これは相当の人だと思えばその人について調べることに力を尽くして、聞くに従って……しるしておいて」「それから日本に帰ってから、ソレを台にしてなお色々な原書を調べまた記憶するところを綴り合わせて、西洋事情というものが出来ました」[13]とあり、その後の慶応三年の「再度米国行き」を含めて、福沢の思想形成や著作に西洋経験が土台になっていったといえる。[14]

（b）学問による思想化

福沢自らのさまざまな経験が学問を通じ、触媒されて思想化が促されていったといえる。「手習いもしなければ本も読まない」幼少時の福沢が、「十四、五才にして初めて読書に志」してまず漢学による学問を開始する（特に白石常人のもとで）。安政元（一八五四）年に兄三之助の勧めで蘭学を志して長崎に遊学し、更に大阪に出て緒方洪庵の適塾に学び、兵術、医学、物理、技術など蘭学修業に没頭する。江戸に出て蘭学塾を開くも、まもなく安政六（一八五九）年に「英学発心」をして特に英学を中心にして福沢の学問展開と思想化が大きく繰り広げられてゆく。

福沢は三度の西洋経験と数多くの辞書や書物の購入を試みてそれらを基にして『西洋事情』を始め『学問のすすめ』『文明論之概略』等々の著述出版活動、演説など啓蒙思想家として邁進していった。福沢の学問論や思想形成において特に注目されることは、「専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学」の強調である。

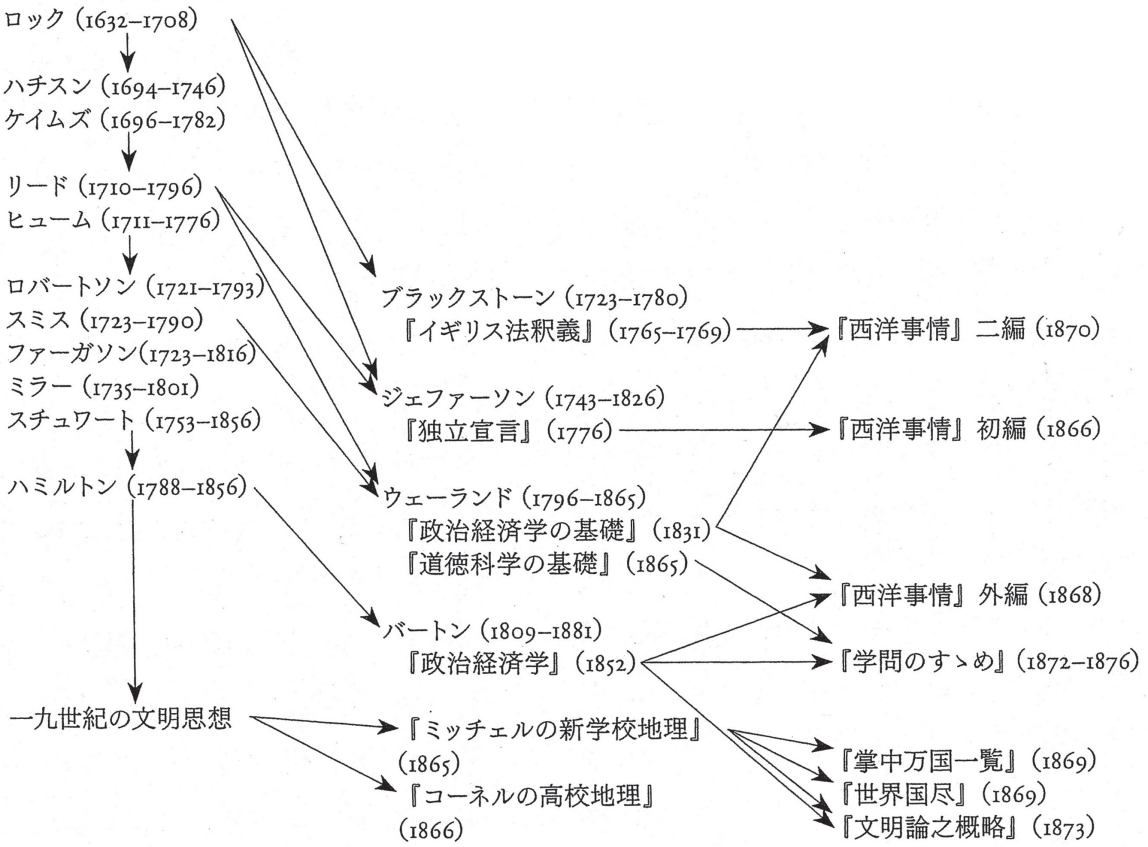
福沢の思想形成のうえで数多くの洋書の購入を図ってさまざまな学者の影響のもとに啓蒙思想家として翻訳を試みたり、それらを土台に構想して著述していったことはよく知られているところである。特に『西洋事情外編』（慶応三年）において福沢はその「題言」で「因（よつ）て今英人チャンブル氏所撰の経済書を訳し、傍ら訳書を鈔訳し、増補して三冊と為し、題して西洋事情外編と云う」としていたが、この本はもともとは英国エジンバラで刊行された『政治経済学―学校用および独学のために』であり、原書は *Political Economy for use in school, and, for private instruction,*（1852）1866 を指している。この初年者向きの教科書はチェンバース兄弟社（W. and R. Chanbers）出版のものであったので、長く「チェンバース経済書」などと言及されてきたが、アルバート・M・クレイグがスコットランド思想、啓蒙思想、リベラリズムの影響を受けたジョン・ヒル・バートン（John Hill Burton）（一八〇九―一八八一）の著作であることを明らかにしている。[15] 更に、福沢の著作に影響した思想・文献等をA・M・クレイグと玉置紀夫の著作の中から引用すると、**表1**、**表2**のとおりである。また、福沢の著作、手拓本とJ・S・ミル、A・d・トクヴィル、H・スペンサー、W・バジョット等の著作との関連を原書にあたって克明に追跡している研究として、安西敏三『福沢諭吉と西欧思想―自然法・功利主義・進化論――』（名古屋大学出版会、一九九五年）、安西敏三『福沢諭吉と自由主義―個人・自治・国体――』（慶應義塾大学出版会、二〇〇七年）、などがある。また、『学問のすすめ』とF・ウェーランドの書物との関連については板倉卓三の論考、[16] 伊藤正雄『福沢諭吉論考』（吉川弘文館、一九六九年）などがある。

福沢はこのように経験と学問を通じて西洋の「事情探索」を重ね、前半期には多くの翻訳意訳にあたり、以後新しい文明社会を生きる思想営為を果敢に試みていったといえる。

（c）歴史状況における再解釈による思想化

自らをとりまく状況の再解釈、再定義の例を挙げれば、一例として、大阪の緒方洪庵の塾に入塾するという判

表1　福沢論吉の初期著作に与えたスコットランド思想の影響



引用：アルバート・M・クレイグ著（足立康・梅津順一訳）『文明と啓蒙―初期福沢論吉の思想―』慶應義塾大学出版会、2009、p.41

断、更に以前にも触れた江戸に出て蘭学から一転しての「英学発心」、王政維新の際に上野での戦争のときに「世の中に如何なる騒動があっても変乱があっても」洋学の命脈を断すまいとしてウェランド経済書の講釈をして慶應義塾での教育を通じて文明化の先導者たらんとする決意もその例である。

『文明論之概略』第七章「智徳の行わるべき時代と場所とを論ず」のなかで、「事物の得失便不便を論ずるには、時代と場所とを考えざるべからず」、「人の失策と称するは、悉皆（しっかい）この時と場所とを誤（あやまり）たるものなり」としている。また、先にも触れたが、『福翁自伝』のなかで「私が居り世に処するの法を一括して手軽に申せば、すべて事の極端を想像して覚悟を定め」る（「老余の半生」）と述べていたが、「時と処」、「事の極端」を考えるということが福沢の思想形成の特徴のひとつとしてあげられる。

表2　福沢の刊行書とその典拠英文献(1868～75年)

刊行年	書　名	英　書
1867/69	雷銃操法＊	A. Walker, *The Rifle: its theory and practice*, London, 1864.
1868	兵士懐中便覧＊	H.L. Scott, *Military Dictionary*, New York, 1861.
1868	訓蒙窮理図解＋	H.G. Bohn, *Pictorial Hand-Book of Modern Geography*, London, 1861.
		Chambers's Natural Philosophy (*Educational Course*, 1836/96), 2 vols., Edinburgh.
		S.S. Cornell, *Cornell's High School Geography*, New York, 1856.
		Mitchell's Modern Atlas, Philadelphia, 1866.
		G.P. Quackenbos, *A Natural Philosophy*, New York, 1859.
		M.A. Swift, *First Lessons on Natural Philosophy for Children*, Hartford, 1833.
1869	洋兵明鑑＊	E. Schalk, *Summary of the Art of War*, 2nd ed., Philadelphia, 1862.
1869	掌中万国一覧＋	G. Ripley & C.A. Dana, *The New American Cyclopaedia*, 16 vols., New York, 1866/67.
		J.R. McCulloch, *A Dictionary, Geographical, Statistical, and Historical, of Various, Places and Principal Natural Objects in the World*, 2 vols., London, 1854.
		G.W. Cox (W.T. Brande ed.), *A Dictionary of Science, Literature and Art*, 3 vols., London, 1865/67.
		Cornell, *Cornell's High School Geography*.
1869	英国議事院談＋	Cox, *A Dictionary of Science, Literature and Art*.
		W. Blackstone, *Commentaries on the Laws of England*, 4 vols., London, 1765/69.
		D.L. Beal, *The Student's Textbook of English and General History from B.C. 100 to the Present Time*, London, 1858.
1869	清英交際始末＋	英字新聞等
1869	世界国尽＋	S.G. Goodrich, *Parley's Universal History*, New York, 1841.
		Mitchell's Modern Atlas.
1871	啓蒙手習之文	英書典拠なし
1872/76	学問のすゝめ	F. Wayland, *Elements of Moral Science*, Boston, 1834.
		Chambers's Moral Class-Books Advanced Reading (*Educational Course*).

1872	童蒙教草＋	A.F. Tytler, *Elements of General History*, Edinburgh & London, 1866.
1872	かたわ娘	英書典拠なし
1873	改暦弁	不　明
1873	帳合之法＋	H.B. Bryant & H.D. Stratton, *Common School Bookkeeping: embracing single and double entry*, New York & Chicago, 1871.
1873	文字之教	英書典拠なし
1873	会議弁	不　明
1875	文明論之概略	H.T. Buckle, *History of Civilization in England*, 2 vols., London, 1875.
		Chambers's Political Economy for Use in School and Private Instruction, Edinburgh, 1852.
		F.P.G. Guizot, *General History of Civilization in Europe*, Oxford, 1856.
		J.S. Mill, *Principles of Political Economy*, London, 1848.
		J.S. Mill, *On Liberty*, London, 1859.
		J.S. Mill, *Considerations on Representative Government*, London, 1861.
		Michell's School Geography.
		Wayland, *Elements of Moral Science*.

注1. ＊：単一英文献翻訳。＋：複数英文献翻訳合成。無印：論拠として英文献の一部を使用。

注2. 典拠英文献の大多数は，幾版も重ねているが，筆者の調査しえた限りでの最古の刊行年を記載した。

出所：富田（1941），富田（1964），太田（1976），松沢（1995），British Library（1979/88），American Library Association（1968/80）。上記文献探索に当たっては，ケンブリッジ大学図書館ライブラリアン，スティーヴン・リーズ氏にお世話になった。

引用：玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯―学で富み富て学び―』有斐閣、2002、pp.90-91

福沢の生涯の前半期（天保五―明治三年、一八三四―一八七〇年）では「英学発心」によって主に翻訳を通じた西洋文明の紹介導入による封建体制の「掃除破壊」の開始、制度の破壊と再構築、これは制度論の展開といえる。中期（明治四―九年、一八七一―一八七六年）では『学問のすすめ』『文明論之概略』などの主著を通じての「独立自尊」、「国の独立は目的なり、今の我文明はこの目的に達するの術」なりと文明化を軸とする啓蒙思想、天賦人権・自然権思想、個人主義、自由主義、進歩主義、産業主義、経験・実証主義、多事争論などの思想を展開していった。しかし、彼の後半期（明治一〇―二七年、一八七七―一八九四年）では、西南戦争、自由民権運動、国会開設運動などが激しくなる一方、明治一四年政変、アジアや欧米列強をめぐる歴史状況、国会開設、教育勅語発令、条約改正運動、日清戦争など国権論、富国強兵主義、帝国主義への動きも強まっていく時期であった。『分権論』『民情一新』『日本婦人論』『男女交際論』『貧富論』『実業論』などを著して、日本の国民国家、新たな文明社会の「建置経営」を試みるべく、時事新報社を創業して「政治の診断医」に徹して「公議輿論」と「官民調和の必要」を強調した。持続して人間交際論、コミュニケーション論、社会変動論などが試みられた。福沢の最晩年期（明治二八―三四年、一八九―一九〇一年）は脳溢血症などの大病を患い没するまでの期間で、『福翁百話』『福翁百余話』『福沢全集（全5巻）』『福翁自伝』などを著した。生涯と歴史状況における福沢の新たな再解釈の試みであり、人生「戯去戯來」として人間安心論を軸に処したともいえる。

三　福沢諭吉の社会学思想についての再考察

近代日本の社会学史の流れを大きく区分すると、（i）草創期（幕末―明治初年）、（ii）生成期（明治一〇年代―三〇年代）、（iii）形成期（明治四〇年代―大正七年）、（iv）成立期（大正八―昭和七年）、（v）変転期（昭和八―

昭和二〇年終戦）、（vi）新たな模索期（昭和二〇年終戦―昭和二八年）のように位置づけることができる。福沢は、確かに「社会学についての学論はしなかったが」（蔵内数太、前出）、これら草創期と生成期において近代日本において啓蒙思想と社会学思想を展開する過程で、自然科学も社会科学（「形ある学問」）も「形なき学問」）もいまだ未分化の状態のなかで社会学を生み出していくひとつの模索を試みていたと考える。以下、彼の（1）啓蒙思想の導入と創成、（2）新しい社会秩序の模索、（3）人間交際論と「社会」の発見（構築）、（4）社会変動論、（5）科学方法論について触れていきたい。

（1）啓蒙思想の導入と創成

先に福沢の思想形成の特徴について（i）旺盛な好奇心、（ii）起業心、（iii）批判精神、（iv）「惑溺」の戒め、そして（a）経験の思想化、（b）学問による思想化、（c）歴史状況における再解釈による思想化について簡潔に触れたが、この啓蒙思想の導入と創成に関してもこうした特徴が大きく関係している。福沢は幼くしてすでに「私のために門閥制度は親の敵で御座る」という思いを強くしながら、そうした社会制度を変えようと、欧米諸国での滞在経験や洋書の読書を通じて日本の鎖国や封建制度、門閥制度による世の無知、暗黒、闇のなかでも、同時代の人々がいだくひそかな胎動を感じつつ、欧米の啓蒙思想の導入を試みながら、光をあてて変革しようと挑んでいった。

長く封建制度を支えた儒学による啓蒙（旧学）、長年の慣習、政治的経済的な仕組みもほころび始め、欧米諸国のアジアへの進出などもあって、日本の洋学者達は、ヨーロッパ中世の暗黒を打ち破りアメリカ独立になどにつながった科学観、自然権思想、社会契約説、経験的社会論などの一八・九世紀の先進欧米の思想哲学の根底にある新たな啓蒙思想を導入していった。そこから近代日本の文明開化が開始されていった。福沢が試みていった

のは、まずは特に旧学の漢学、儒学や古い思想、制度の「掃除破壊」であり、次いで洋学を揚げて新たに人間普通有用の実学や実業、思想を基にした「建置経営」の試みであった。このことは人間と思考、道徳、歴史とのかかわりをめぐる新たな仮説の提示であり、新たな価値をめぐる思想的な営みでもあった。

先の表1、表2に示したように、福沢の主要な著作である『西洋事情』（初編・外編、一八六六―一八六八年）、『学問のすすめ』（一八七二―七七年）、『文明論之概略』（一八七五年）などはいずれもスコットランド・イギリス啓蒙思想やフランス啓蒙思想の強い影響のもとに翻訳意訳され著作されたものであることが分かる。[17] 新旧思想の混乱状態のなかで森有礼、西村茂樹、福沢諭吉、西周、津田真道、神田孝平、加藤弘之、杉享二、中村正直らによって明治六（一八七四）年設立された「明六社」の活動もこうした啓蒙思想の導入や普及を図るためのものであった。[18]

近代啓蒙思想の特徴である合理主義、個人主義、自由主義、進歩主義、経験的実証主義、科学主義、産業主義などは福沢の啓蒙思想とも重なるところであるが、福沢は西洋啓蒙思想の単なる導入や紹介普及にとどまらずに、日本が置かれた歴史的文脈のもとで彼の教育・著作活動、演説会や新聞『時事新報』の発刊などを通じた自らの啓蒙思想の創成ともいえる。わが国において第二次世界大戦終了後に福沢諭吉の思想、啓蒙思想が再び脚光をあびるようになるのは故なしとしない。

（2） 新しい社会秩序の模索

洋学や啓蒙思想等に接触する過程でこれまでの世間や世の中の人々の間の結びつき、付き合い、仲間などに関して当時の洋学者らには、異文化の society, société, gesellschaft などの西洋の言葉、また現在では社会学と通称されるようになっている sociology, soziologie などを日本語としてどのように邦訳するのかに関しては困難と苦

労が重ねた。前者については「人間仲間、人間相養生之道、交際、社会など」、後者については「人間学、交際学、世態学、社会学など」の用語が試みられ、明治一〇（一八七七）年前後より「社会」、「社会学」の邦訳名が「勝利したのである」とされている。[19]

「society の邦訳名」「sociology の邦訳名」をめぐって、いつ頃にどのように邦訳がなされてきたのかの起源をめぐる考証も重要である。「しかし社会学の起源について正確な時期を定めることよりも、社会学が何を意図したか、それが取り扱う問題は何であったか、その発生の背景をなす社会思想の推移はどうであったかなどを理解することのほうがはるかに重要である」[20]という指摘は、近代日本社会学の草創期、生成期の動きを考察するという本論の文脈においては大切なことである。

福沢の主たる著作である『西洋事情』『学問のすすめ』『文明論之概略』『福翁自伝』などを通じて、彼の重要な考え方、概念を表す言葉として、わたしは「人間・人」、「習慣」、「人間交際」、「家族」、「制度」、「文明」を挙げることができるのではないかと考える。

人間・人については、スコットランドの John Hill Burton の執筆によるとされている *Political Economy, for use in schools, and, for private instruction,* Edinburgh, 1852? をもとに福沢が訳して著した『西洋事情外編』の巻之一の冒頭に原著では〝Introductory — social organization〟とあるのを「人間」と訳して、「人の生ずるや、天より之に与ふるに気力を以ってし、之に附するに性質を以ってし、此の気力と性質とに由りて外物の性に応じ、以って身を全（まつとう）して、朝露の命を終わることを得るなり」、「人間開闢の初に於いては、固より相交わるの道（human society）を教る者なし。唯其の自然に希望する所と人気（じんき）の赴く所に随って、知らず識らず交際の法則を設けて互いに便利を得たりしことなれども、歳月を経るに従って、其諸法の内より至当なるものを撰んで終に一科の学と為し、之を人間の交際及び経済の学（a science of social and political economy）と名（なづけ）けり」と記している。

また、『学問のすすめ』では初編の冒頭に「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云えり」として、人と人との間での「権利通義」としての同等と、人間の働きとしての「有様」とを区別している。このところは『西洋事情外編』では「人生の通義及び其職分」（バートンの原書では individual rights and duties）と重なるものである。権利通義としての同等は人間の本性に、働きとしての有様は人間の習性にかかわる。

習慣は、福沢が特に重視した人間の行動傾向・様式である。『学問のすすめ』の三編の「一身独立して一国独立する事」のなかで、「独立の気力なき者は必ず人に依頼す、人に依頼する者は必ず人を恐る、人を恐るる者は必ず人に諂うものなり。常に人を恐れ人に諂う者は次第にこれに慣れ、その面の皮鉄の如くなり、恥ずべきを恥じず、論ずべきを論ぜず、人さえ見ればただ腰を屈するのみ。いわゆる習い性となるとはこの事にて、慣れたることは容易に改め難きものなり」とある。『文明論之概略』の「緒言」でも、「文明論とは、人の精神発達の議論なり」「けだし人の世に処するには、局所の利害得失に掩われて、その所見を誤るもの甚だ多し。習慣の久しきに至っては、殆んど天然と人為とを区別すべからず。その天然と思いしもの、果して習慣なることあり。あるいはその習慣と認めしもの、かえって天然となることなきにあらず」[21]としている。「利を争うは即ち理を争うことなり。今、我日本は外国人と利を争うて理を闘すの時なり。」「けだしその気象なくまたその勇力なきは、天然の欠点にあらず、習慣に由りて失うたるものなれば、これを恢復するの法もまた習慣に由らざれば叶うべからず。習慣を変ずること大切なりというべし」[22]とある。

また、『福翁自伝』では習慣という言葉はかなり用いられているが、「個人の奴隷心」「権力偏重」「先方の人を見て自分の身を伸び縮みするような」「まるでゴム人形」などという言葉もよく用いられている。

人間交際は福沢の思想のなかでもっとも重視されていた特徴ではないかと考える。先の人間・人のところでも既に触れたように『西洋事情外編』のなかで、「相交るの道」（human society）、「人間の交際」（social economy）、

「人間の交」(society)、「人間交際の道」(social system)など、そして『初編』では「外国交際」などの訳が試みられて、更に『学問のすすめ』の九編では「人の性は群居を好み決して独歩孤立するを得ず」、「即ちこれ人間交際の起こる由縁なり」、「凡(およ)そ世に学問といい工業といい政治といい法律というも、皆人間交際(にんげんこうさい)のためにするものにて、人間の交際あらざれば何れも不用のものたるべし」と強調していたところである。

家族も福沢が重視した側面であろう。『西洋事情外編』のなかでは先のバートンの文章を訳して「人間」に次いで、「家族」(family circle)が位置づけられて「人間の交際は家族を以って本(もと)とす」(the ground of social economy is in the Family Circle)としている。[23]『文明論之概略』のなかでも「夫婦親子一家にいるものを家族という」「一家の交際は専ら徳義に依りて風化の美を尽くせり」という。その後の著作『日本婦人論』(明治一八年)、『男女交際論』(明治一九年)、『日本男子論』(明治二一年)なども、人間交際論に関わるものでもあるが、封建社会の身分制度や儒教、「女大学」等にもとづく男女の交際の有り様を批判して、「一身独立」を基にして「情愛」「敬愛」に比重をおいた家族論であり、新たな家族像、男女交際像を模索するものであった。のちの『福翁百話』のなかでは「夫婦の間敬愛なかるべからず」、「子に対して多を求む勿れ」、「子として家産に依頼すべからず」と記している。一面では当時のスコットランド啓蒙思想の「家族」像に影響を受けたものといえるが、他面では『福翁自伝』の「品行家風」のなかで自らの「家事家風」を語っていたように、福沢自らが母子家庭で姉など女の多い家族で育った自身の経験をも多分に写し出している家族像であったともいえる。

制度については、『学問のすすめ』初編のなかで「世の中の人も数千百年の古(いにしえ)よりこれを嫌いながらまた自然にその仕来りに慣れ、上下互いに見苦しき風俗を成せしことなれども、畢竟(ひっきょう)これらは皆法の貴きにもあらず、品物の貴きにもあらず、ただ徒(いたずら)に政府の威光を張り人を脅(おど)して人の自由を妨げんとする卑怯なる仕方にて、実なく虚威というものなり、今日に至りては最早(もはや)全日本国内にかかる浅ましき制度風俗[24]」、「学校の制度」(九編)

などのように用いられ、『福翁自伝』でも「封建制度」「封建の門閥制度」「古来の門閥制度」などのように用いられている。古い制度の「掃除破壊」に意を用いて、新たな秩序の「建置経営」はまさに進行されるべき課題としてとらえられている。

文明は、すでに『西洋事情外編』のなかで「世の文明開化」（civilisation）の項を設けて「蛮野の世」、「半開半化の国」、「文明の国」が語られ、『学問のすすめ』においてもその七編で「元来文明とは、人の智徳を進め人々身躬（みみず）からその身を支配して世間相交わり、相害することもなく害せらるることもなく、各々その権義を達して一般の安全繁昌を致すを言うなり」として数多く用いられている。国内の文化や文明の有り様を対外的なかかわりのなかで論じ、『文明論之概略』のなかで更に詳しく論じられていくことになる。文明の考え方は人間交際と同様に福沢の考え、視点のなかで最も重視されたものである。

以上の福沢の用語と考え方は、近代科学の誕生がF・ベーコン（F. Bacon, 1561-1626）のいう偏見や偶像（idols）からの人間の解放に始まったように[25]、西洋や東洋の日本などさまざまな体験事実に支えられつつ因習的な、あるいは封建的な旧来の社会観を懐疑し批判して、新たな社会秩序を模索して、社会生活を解明していく試みとしてすぐれて社会学的視点や社会学的問題を提起していたと考える。やや遅れて人間事象を考察する社会科学も、その一つの学問分野としての社会学も、こうした歴史的な文脈を背景にして生み出されていくことになる。

（3） 人間交際論と「社会」の発見（構築）

「社」はもともとは土地の守護神、集団共同の土地神、それらを中心とした集落・部落・集団体、世の中、世間などを意味する言葉であった。「“Society”の邦訳名〝社会〟なる名称は古来よりの言葉ではなく、明治初期の外国語の邦訳語で、それが現代広く使われるにいたった。明治維新前後、society, société, societet, gesellschaft

をいかに邦訳したらよいかに、識者は非常に苦心した。」津田真一郎（「人間の公会」「人間仲間」）、西周（「人間相養生之道」「社交」「会社」「社会」）、福沢諭吉（「世間」「会社」「人間交際」「社会」）、福地源一郎（「会社」「社会」）、加藤弘之（「会社」「交際」）、中村敬宇（「仲間会社」「衆人結神」）など、同じ訳者でも時とともに訳名を変えたりしたが、林恵海の表現によると、「これらのうち、会社・交際・世態・社会の四邦訳名が残存し、ついに〝社会〟なる邦訳名が勝利して、現代にかくも盛行するにいたった」という。しかし、その「盛行」のために、人々の生活事実としての「世間」「世の中」の側面への考察を持続的に深めていく機会も乏しくしていったともいえる。従来の社会学史研究も、ともすると、訳語としての「社会」の意味するわが国での歴史的な内実や広がりを問うことなく、勝利した「社会」が一人歩きしてきた感がないでもない。

そこで福沢諭吉が“society”を主に人間交際と訳していたことはすでにとりあげたが、「社会」がただ勝利したという側面だけでなく、福沢が世間、世の中、人間交際、社会などをどのような脈絡で邦訳していったのかということに関心を向けていきたい。

柳父章『翻訳語成立事情』はこの辺のところをとりあげて「世間」と「社会」の用法などにも触れており興味深く示唆を得るところが大きい。[26] 福沢は『西洋事情外編』や『学問のすすめ』などにおいても「社会」のもつ（i）仲間同志の結びつきや交際、（ii）より広い範囲での生活組織や集合体の関係とに大きく分けて用い、また「世間」などについても狭い意味での「世間」と広い意味での「世間」を文脈に応じて用いていたと考えられる。『西洋事情外編』の「人生の通義及びその職分」（individual rights and duties）のところで、

> 人間交際の大本（たいほん）を云えば、自由不羈の人民相集て、力を役し心を労し、各々其功に従て其報を得、世間一般の為めに設けし制度を守ることなり。[27]

とあるが、原文にあたる *Educational Course, Political Economy, for use in schools, and for private instruction,* William and Robert Chambers, London and Edinburgh, 1870（国立国会図書館所蔵）のなかでその文章は、

> The idea of perfect society supposes an assemblage of free citizens, each contributing his labours for the benefit of the whole, and receiving an appropriate remuneration, and each respecting an those laws which have been ordained for the general benefits. (p.4)

である。この英文の society は周知のように「人間交際」と訳されているが、福沢が「世間一般の為に」と書き入れているところは“for the benefit of the whole”の部分であり、他に「世間」にあたるという語がないにもかかわらず「世間」という語を入れて訳しているところも見当たる。また、「世人相励み相競ふ事」（society a competitive system）の見出し項では、society を「世間」と訳しているところも見出される。

『学問のすすめ』の一七編、人望論（明治九年）で「やや見識高き士君子は世間に栄誉を求めず、或いはこれを浮世の虚名なりしとして殊更に避くる者あるも無理ならぬことなり」、「また一方より見れば社会の人事は悉皆虚をもって成るものに非ず」としている。この場合の世間はどちらかというと狭い世間を意味し、この世間と社会とは「対立するような意味」[28]で用いられているといえる。そして、『学問のすすめ』九編で「凡そ世に学問といい工業といい政治といい法律というも、皆人間交際あらざれば何れも不用のものたるべし」[29]として人間交際を重要視する考えは、『学問のすすめ』が初めてではないが、本論で社会学思想を考察するうえでも極めて重要である。『福翁自伝』になると、例えば「剣術の全盛」のところで「世の中はただ無闇に武晴るばかり」、「当時少

しく世間に向くような人間はことごとく長大小を横たえる」。他に「日本国中ただ慶應義塾のみ」のところでは「世間に頓着するな」とあり、「老余の半生」の「仕官を嫌う由縁」のところで「世間は広し」、「文明駸駸乎して進歩する世の中」などと記している。「人間は社会の虫なり」のところで「社会全体」、「日本社会の大変革」、他に「社会の利害」「社会の交際」「著訳社会」「政治社会」などの用法がなされていた。それまで society の訳語として主として用いてきた人間交際の用語は社会という訳語で言葉として広まっていくにつれて福沢自身もこの『自伝』のなかでは、人間交際の用語は殆んど用いていない。しかし、『西洋事情外編』『学問のすすめ』『文明論之概略』『男女交際論』等においても、この人間交際の考え方は独立自尊の考え方とともに福沢のもっとも基礎となる発想であったといえる。

福沢にみる人間と社会の関係づけ（秩序づけ）は、個人が人々の間の具体的な行為としての人間交際を、家族も含めて中間レベルでのさまざまな諸集団とのかかわりのなかで、そして狭い世間や広い世間、世の中で繰り広げていく過程で、より広く社会的なつながりを見出し構築していくものとして捉えられていたと考える。『学問のすすめ』一七編、人望論で、「言語を学ばざるべからず」、「顔色容貌を快くして、一見直ちに人に厭わるること無きを要す」、「人類相接せざれば互いにその意を尽くすこと能わず、意を尽くすこと能わざればその人物を知るに由なし」として、情報やコミュニケーションの重要性を指摘していた。近代日本社会学の草創期における福沢のこの個人主義思想や関係論的視点の胚胎は、その後の生成期や確立期、変転期においてはどちらかというと社会有機体説、国家本位主義や集団主義、規範主義、民族主義的思考がかなり根強くなり、「社会」は多くは国家社会として論じられ、生活する人々の「世間」や「世の中」、「市民社会」、日常生活には部分的にしか眼が向けられていかなかったともいえる。(30)

（4） 社会変動論

「社会変動とは、時間とともに、社会構造を構成する役割、制度、秩序に生ずるあらゆる変化」[31]であるとすれば、「一身にして二生を生きる」として社会制度の掃除破壊と建置経営に生涯とり組んだ福沢の活動は、社会変動論の展開そのものである。『学問のすすめ』、『文明論之概略』、『旧藩情』、『分権論』、『貧富論』、『民情一新』、『男女交際論』等々と社会変動論に満ちた諸論が試みられている。ここではいくつかの特徴に言及するにとどめたい。

「独立の活計は人間の一大事」、されど「人の性は群居を好み決して独歩孤立するを得ず」。「文明の効能は、僅かに一場の戦争をもって止むものに有らず。故にこの変動は戦争の変動に有らず、文明に促された人心の変動なれば、この戦争の変動は既に七年前に止みてその跡なしと雖ども、人心の変動は今なお依然なり」（『学問のすすめ』の九編、明治七年）。

『文明論之概略』（明治八年）では、「文明論とは、人の精神発達の議論なり」として、文明には文明の事物と文明の精神（人心風俗、人民の気力）の二つがあり、その精神の発達には智徳の進歩こそ重要であるとする。「文明」「半開」「野蛮」という巨視的な文明の比較と進歩発展の段階が設定されている。そして時節と場所とを考えて文明に導くためには、古習虚飾の惑溺を戒めて「精神の活発、人と人との交際の必要」「独一個人の自由と進歩」「勇を振て我思う所の説を吐くべし」とする多事争論の必要を強調する。

『旧藩情』（明治一〇年）で旧中津藩の上下両等の士族間の栄誉利害の身分差を詳しく指摘してその身分差を解消する積極策はなかなか見出しにくく、消極ではあるが、「旧藩社会」を変えるには「今の学校を盛んにすること」、「上下士族相互に婚姻の風を勧（すすむ）ること」を挙げている。前者は新たな学校のすすめ、学問のすすめによる人心の変動であり、後者は身分間・階級間の婚姻、通婚圏の拡大、新たな人間交際のすすめである。

『民情一新』（明治一二年）は、新たな国会開設を前に民情一新の必要を説いて書かれたものである。西洋諸国の文明開化は、蒸気船、蒸気車、電信、郵便、印刷等（文明の利器）の発明工夫がもたらした交通往来、社会交通によるところが大であり、その力が民情、社会の心情をもたらしている。保守の主義と進取の主義が相対峙して自ら進歩すべし、文明の利器を利用するのは進取の人であり、今世において国安を維持する方法は平穏の間に政権を授受すべきこと、そして来るべき国会開設にあたっては政権を得た者が永世不変、長座を謀ることのないようにと説いた。また、国家として明治政府が成立して次第に中央集権化が進もうとするなかで福沢は『分権論』（明治一〇年）において全国一般の租税、外交、貨幣、徴兵などにかかわる「政権」（government）と国内各地の便宜を図るため警察、道路、堤防、学校、衛生などにかかわる「治権」（administration）とを区別して、治権にかかわるところは国内各地に分権化すべきことを説いていた。

福沢は習慣の力は根強く、変えるのは難しいが、人々の気力や智力を変えて「人心の変動」を促し回復していくのもまた習慣の力であり、社会を変えていく力は、外からの刺激や圧力、「西洋化」、文明の事物、蒸気船などの文明の利器、異文化体験などの外発的・外生的要因と、人々の自らの気力と智力、「人心の変動」、さまざまな人々との人間交際、情報伝達と議論、公議輿論、多事争論などの内発的・内生的要因との相互の触媒によって促されていくと考えていた。より重視したのは自らの内側からの変化であり、さまざまな多くの人々との人間交際であった。

（5）科学方法論

本論の最初のところでも触れたが、蔵内数太は幕末の帆足万里の『窮理通』などを挙げながら、「西洋の科学的思惟方法が社会的事実の取り扱いに与えた影響は……とくにそれが顕著にみとめられるのは福沢諭吉の思想で

ある」としていた。[32]

社会事象の経験的事実について客観的因果的に説明しようとする科学的方法の試みは、福沢の多くの著作のなかに見い出せる。西洋の啓蒙思想に触れる以前に『福翁自伝』の幼少時の体験として「反故（ほご）を踏みお札を踏む」「稲荷様の神体を見る」などの体験をしたり、少し距離をおいてものごとを観て考えるという姿勢は一貫していたといえる。『学問のすすめ』一五編「事物を疑って取捨を断ずる事」（明治九年）のなかで、「信の世界に偽詐（ぎさ）多く、疑の世界に真理多し」、「この雑踏混乱の最中に居て、よく東西の事物を比較し、信ずべきを信じ、疑うべきを疑い、取るべきを取り、捨つべきを捨て、信疑取捨その宜しきを得んとするは難きに非ずや」とまず事物・事象・人間に接して距離を置いて懐疑してみることの大切さを説いているのは、科学方法論の出発点でもある。[33]『学問のすすめ』の十二編のなかで、「学問の本趣意は読書のみに有らずして精神の働きに在り」として「視察、[34]推究、[35]読書はもって智見を集め、談話はもって智見を交易し、著書演説はもって智見を散ずるの術なり」「談話と演説とに至っては必ずしも人と共にせざるを得ず」と示唆に富む言及をしている。①智見を集める（収集）、②智見を交易する（相互交換）、③智見を散ずる（発表）、行為の相互の重要性を指摘していて興味深い。この三角測量の活動は、科学的方法と活動にも連なっていく。

福沢の旺盛な好奇心と社会観察の事例は、『福翁自伝』、「万延元年アメリカハワイ見聞報告書」（万延元年、一八六〇年）、『西航手帳』（文久二年、一八六二年）、『西航記』（文久二年）、『旧藩情』（明治一〇年）、更に一例として都鄙別、智愚別、年齢別でいずれが保守の主義、進取の主義に従うかなどに関する福沢の観察智見（仮説）などを試みた『民情一新』（明治一二年）などにも数多く記されている。観察される（た）事象や「有様」、「所論」や「所業」を比較してみることが重要となる。「有様を比較するとはただ一事一物を比較するに非ず、その一体の有様と彼の一体の有様とを並べて、双方の得失を残らず察せざるべからず」[36]とする。更に一国内にとどまらず、

「もし一国を全体の一物と視做(みな)して他の文明の一国に比較し、数十年の間に行わるる双方の得失を察して互いに加減乗除し、その実際に見(あら)われたるところの損益を論ずることあらば、その誇るところのものは誇るにたらざるものならん」[37]として、『文明論之概略』の構想や考察にも重なっていく。

「人間万事、数理の外に悦すること叶(かな)わず、独立の外に依るところなしというべきこの大切なる一義を、わが日本国においては軽く視ている」として、「有形において数理学」と「無形において独立心」[38]を強調した福沢が、『学問のすすめ』（初編）のなかで特に重視していたのは「専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学」であった。特に事象や働き「その一体の有様と彼の一体の有様とを並べて」（比較して）、「双方の得失を残らず察す」るうえで好んで重視され用いられた方法が統計法であった[39]。

『文明論之概略』のなかでも穀物の物価と婚姻の数などの関連などのように「天下の人心を一体と視做(みな)して、久しき時限の間に広く比較して、その事跡に顕わるものを記すの法」が統計、「スタチスチク」であり、それを通じて規則性・定則（regularity）が見出され、「この趣意に従て事物を詮索すれば、その働の原因を求めるに付き大なる便利あり。そもそも事物の働きには、必ずその原因なかるべからず。この原因を、近因と遠因との二様に区別し、近因は見易くして遠因は弁じ難し」とする要因分析なども興味深い。変動期にあって人心の変動の実態やその重要性を統計的手法などの科学方法論を実験、活用して実証しようとしていた福沢の姿勢を窺い知ることができる。福沢の若い時からの適塾などでの「窮理学」や「有形の学問」への関心、「目的なしの勉強」が、「無形の学問」のなかでもこのような形で活かされているといえる。

四　むすびに

この小論は、「近代日本における社会学の草創と福沢諭吉の社会学思想の再考察」と題して検討を試みたものである。冒頭の「一　近代日本における社会学の草創」では、その展開の時期を幕末から明治一〇年頃までの草創期、明治一〇年代～三〇年代の生成期、明治四〇年代～大正七年の形成期、大正八年～昭和七年の成立期、昭和八～昭和二〇年終戦までの変転期、昭和二〇年終戦～昭和二八年までの新たな模索期、更に現代社会学の時期と分けたときに、特にわが国の社会学思想史研究の遅れを反省し、啓蒙思想家で『百学連環』『生性発蘊（はつうん）』などを著した西周、そして福沢諭吉などのこの期の社会学思想についての研究が必要であると指摘した。ここでは福沢の社会学思想を中心にとりあげて日本社会学史研究のもうひとつの可能性を探るという問題提起を試みた。

「二　福沢諭吉の思想形成の特徴」は、大まかな把握ではあるが、彼の（1）旺盛な好奇心、（2）起業心、（3）批判精神、（4）「惑溺」への戒めをとりあげて、①智見を集め、②智見を交易し、③智見を散ずるという考えを示唆に、更に思想形成の三角測量（triangulation）の観点から、彼の思想化の特徴として（a）経験の思想化、（b）学問による思想化、（c）歴史状況における再解釈による思想化に触れて、（a）（b）（c）のいずれかに極端に凝り固まったり傾いたりすることなく溺れることなく、時と場所に応じて、そして「事をなすに極端を想像す」の考えをもとに弾力的に思想化を試みていったといえる。そう考えると、福沢を一方的に極端なイデオローグに仕立てたり、偶像化してしまうことも戒められなければならないと考える。

次に「三　福沢諭吉の社会学思想についての再考察」のところでは、福沢は「社会学の学論はしなかったが、社会学を実践したというべきある」という蔵内数太、「福沢の人間交際の論とはまごう方なく一個の社会学を意味していたのである」という武田良三などの先駆的な示唆を受けて、社会学的な準拠枠に照らして福沢の（1）

啓蒙思想の導入と創成、（2）新しい社会秩序の模索、（3）人間交際論と「社会」の発見（構築）、（4）社会変動論、（5）科学方法論を検討した。

世界の社会学の展開、社会学思想史の展開の同時代史に照らしても、具体的な社会学書や社会学的な研究書が出てくる以前のそれぞれの国の土壌のもとで社会学の草創期の啓蒙思想家、百科全書的な思想家などについても研究が深められる必要があろう。[40] 明治期において後進日本の近代国家建設の過程で、先進欧米列国の最先端の最新の学問動向を次々と紹介導入しようとすることに急いで、じっくりと自らの足元の土壌を耕して事を進める作業、学問を深めていく作業がなおざりにされ続けてきたのではないだろうか。自らの経験や現実と他の経験や新たな思想・理論、導入理論とが相互に媒介されてこそ、新たな展開、経験、洞察、啓蒙が可能となる。秋元律郎が著書『日本社会学史―形成過程と思想構造―』（一九七九年）のなかで近代日本における社会学の展開に見られる「現実への追随と導入理論へのもたれかかり」という特徴を指摘しているところを改めて考えてみることも重要である。[41]

これまでは、明治一〇年代以降のフェノロサ『フェノロサの社会学講義』、外山正一、有賀長雄、建部遯吾などの生成期以降を出発点とする近代日本社会学史研究が多かったように思える。近代日本社会学史研究の可能性を社会学思想史の領域でも更に再検討していく試みが必要である。福沢諭吉、西周らの特に啓蒙思想家の社会学思想をあらためて対比しながら深めて考察していくことが今後の課題である。

（1）川合隆男『近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化―』恒星社厚生閣、二〇〇三、一九～二三頁。この書は社会学史研究の領域からいえば（d）の領域、また拙書『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生閣、二〇〇四、は（b）領域に位置づけられる。

（2）武田良三「わが国における市民社会の形成と社会学」社会科学部門委員会編『近代日本の社会科学と早稲田大学』、早稲田大学七十五周年記念出版、一九五七、三七六頁、武田「日本の市民社会と社会学」『産業社会の展開と市民社会』弘文堂、一九六四、二五八～二八〇頁。

（3）蔵内数太『社会学　増補版』培風館、一九六六、八二～八三頁。

（4）大道安次郎『日本社会学の形成　九人の開拓者たち』ミネルヴァ書房、一九六八。

（5）湯本豪一編『図説　明治人物事典―文化人・学者・実業家―』日外アソシエーツ、二〇〇〇、四三一～四三五頁。

（6）神山四郎「福沢諭吉の文明史論」内山秀夫編『一五〇年目の福沢諭吉―虚像から実像へ―』有斐閣選書、一九八五、二～六頁。

（7）同、七～八頁。

（8）長尾正憲『福沢屋諭吉の研究』思文閣出版、一九八八。福沢は『福翁自伝』のなかでこの起業を「一大投機」と記している。

（9）福沢諭吉「演説の法を勧むるの説」『学問のすすめ』十二編、岩波文庫、松崎欣一『三田演説会と慶應義塾系演説会』慶應義塾大学出版会、一九九八。

（10）玉置紀夫『起業家福沢諭吉の生涯―学で富み富て学び―』有斐閣、二〇〇二。

（11）福沢『文明論之概略』岩波文庫、一九九五、第二章。

（12）同書、四九頁。

（13）『新訂　福翁自伝』ワイド版岩波文庫、一九九二、一三二～一三三頁。福沢「万延元年アメリカハワイ見聞報告書」、「西航記」（『福沢諭吉選集』第一巻所収、岩波書店、一九八〇）、「西航手帳」「慶応三年日記」（『福沢諭吉全集』第一九巻所収、一九六二）、『西航手帳（文久二年）』（復刻、福沢諭吉生誕百五十年記念出版）（解説・解読、富田正文・長尾政憲）、福沢諭吉協会。これらは、いずれも福沢の現地での観察や見聞を記したフィールド・ノートともいえる野帳である。福沢の用意・準備周到な姿勢をみることができる。

（14）森有正『経験と思想』岩波書店、一九七七、一六～一七頁、一一一頁。松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』岩波書店、一九九三、六一頁。

(15) A・M・クレイグ「ジョン・ヒル・バートンと福沢諭吉―『西洋事情外編』の原著は誰が書いたか―」『福沢諭吉年鑑』十一号、一九八四、アルバート・M・クレイグ著（足立康・梅津順一訳）『文明と啓蒙―初期福沢諭吉の思想―』慶應義塾大学出版会、二〇〇九、特に「第三章　ジョン・ヒル・バートンの『政治経済学』」を参照。

(16) 板倉卓造「『学問のすすめ』とWayland's Moral Science」『三田政治学会雑誌』第九号、一九三四。

(17) A・M・クレイグ著、前出、玉置紀夫著、前出、板倉卓蔵、前出、間崎万里「福沢諭吉の『西洋事情』」『史学』（三田史学会）第二四巻第二、三号、一九五〇、河野健二「啓蒙思想家としての福沢諭吉」（慶應義塾大学『福沢記念選書』十二）、一九七五、山脇直司『社会思想史を学ぶ』ちくま新書、二〇〇九。

(18) 戸沢行夫『明六社の人びと』築地書館、一九九一、『明六雑誌』（上・中・下）岩波文庫、一九九九、二〇〇八、二〇〇九。

(19) 林恵海「日本社会学の発展」日本社会学会編『教養講座　社会学』有斐閣、一九五三、三〇七～三一四頁。

(20) P・M・ハウザー（Philip. M. Hauser）著、小山隆・細井洋子訳「社会学」『ブリタニカ国際百科事典』第九巻、一九九一、六三～六八頁。

(21) 『文明論之概略』「緒言」、岩波文庫、一九九五、九頁。

(22) 同、一一七～一一八頁、丸山眞男「福沢における「惑溺」」丸山眞男著・松沢弘陽編『福沢諭吉の哲学、他六篇』岩波文庫、二〇〇一。

(23) 『西洋事情外編』（『福沢諭吉選集』第一巻、一九八〇）、一六七頁。

(24) 『学問のすすめ』岩波文庫、前出、一五頁。

(25) 福沢は『西洋事情初編』（『選集』第一巻）のなかの「文学技術」のところで、ベーコンやデカルトのことを「フランシス・バーコン、デス・カルテス等の賢哲」として触れている。一一六頁。

(26) 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書、一九八二、三～二二頁。

(27) 『西洋事情外編』前出、一七〇頁。

(28) 柳父章、前出、一七頁。

(29) 『学問のすすめ』九編、前出、八三～八六頁。

(30) 川合『近代日本社会学の展開』前出、三九～四六頁。
(31) P・L・バーガー（安江孝司・鎌田彰仁・樋口祐子訳）『バーガー社会学』学習研究社、一九七九、二一頁。
(32) 蔵内数太『社会学　増補版』前出、八一頁。
(33) マックス・ウェーバー（西島芳二訳）『職業としての政治』角川書店、一九五九、のなかの「事物と人間に対する距離（Distanz）」、「距離への習熟によってのみ可能」という指摘とも重なる。
(34) 『学問のすすめ』、一〇七頁に「「ヲブセルウェーション」とは事物を視察することなり」とある。
(35) 同、「リーゾニング」とは「事物の道理を推究して自分の説を付ることなり」とある。
(36) 『学問のすすめ』前出、一〇九頁。
(37) 同、一一一頁。
(38) 『福翁自伝』前出、二〇六～七頁。
(39) 西川俊作「「然るに統計の実験に於ては」―福沢先生の統計的方法・断章―」『三色旗』二六〇号、一九六九年十一月。
(40) Alan Swingewood, *A Short History of Sociological Thought*, Macmillan Press, 2000.
(41) 秋元律郎『日本社会学史―形成過程と思想構造―』早稲田大学出版部、一九七九、特に第八章を参照。